

2016. 7. 12 (火)

生類憐みの令と考えさせるクイズ

立石裕二

真実であることと関心を持てること

今日は、「真理はあなたを自由にする」という、今週のチャペルのテーマから話を始めようと思います。

真理とは「確実に正しいと認められる事柄」といった意味ですが、世の中には正しいと認められる事柄というのは、たくさんあります。あまりにたくさんあるので、そのほとんどは一生知ることもありません。

私がそれを痛感するのは、6歳の息子と話しているときです。息子は一時期、自動車にはまっていて、かなりマニアックなこと、例えばトヨタのアルファードと日産のセレナはどこが違うかといったことを、熱く語っていた時期がありました。その時々で興味関心の対象は、鉄道、宇宙、プロ野球、海洋生物、恐竜などと移り変わっていますが、子ども向けの図鑑やテレビ、先生や友達との会話などを通していろいろな知識をためこんでは、私に披露してくれます。私自身詳しくはないですが、息子が話していることの多くは、おそらく間違っていないでしょう。その意味で、少し大げさですが、「真理」といえないこともありません。

しかし、アルファードとセレナの違いを聞いて何になるかといえ、間違いなく何の役

にも立ちません。しかも我が家の場合は、妻も私も車を運転しないので、ますます何の役にも立たない。子ども本人にとっては、いろいろなことを覚えるのはいいことだね、という微笑ましい状況である一方、聞く側としては、その中身にダイレクトに関心を持てるかといえ、悩ましいところがあります。真実かどうかと、それに関心を持てるかどうかは、必ずしも一致しないわけです。

考えてみると、こういう状況は学生のみならずにとっても日常茶飯事です。社会学部にいると、「自分の興味関心に沿って授業を取りましょう」というフレーズをよく耳にするとと思いますが、実態は、だいたいかけ離れているのが現状だと思います。まじめな学生は一生懸命、自分の興味関心にあった授業を探していると思いますが、そんな授業は多くないでしょうし、たまに面白そうな授業があっても、申し込みが殺到して抽選で落ちてしまうこともあります。履修する授業の多くは、そこまで興味がない科目にならざるをえません。

もちろん、学校の勉強なのだから、つまらなくても仕方がないと割り切るのも一つの考え方です。たとえば経済学部であれば、社会人になって企業で働く上では、こういう知識が必要だから、という説明ができます。ある

いは法学部でも、法律の知識は将来こういう場面で役に立つからと説明できて、つまらなくても、それなりに納得して聞けるわけです。社会学部の場合も役に立つという説明の仕方は可能ですし、教員サイドとしては、教えたいたい事柄もたくさんあるのですが、教員のもつ知識を一方向的に教えこむというスタンスはとっていません。むしろ、学生の側で学びたいことがあって、それに沿って授業にアクセスする。つまり学生の関心から出発するという形になっているわけです。

「生類憐みの令」と仮説実験授業

だからこそ社会学部では、初めはあまり興味が無いテーマに対して、いかに関心を持つのか、教員の側としては、いかに関心を持たせるのか、が大事になります。これは私にとっては関学で教え始めて以来の悩みの種です。とくに「科学・技術の社会学」の授業に関しては、「数学が苦手なので社会学部に来たけど、こういう話は大好きです！」という学生もときどきいますが、大多数の学生はiPhoneのような身近なテクノロジーにしか反応しません。いかに多くの学生に関心を持ってもらうかをずっと考えてきました。その中で、とても参考になった本があるので紹介します。板倉聖宣（いたくら・きよのぶ）さんの『生類憐みの令』という本です。

生類憐みの令は、日本史の授業で聞いたことがありますよね。徳川綱吉が出した、犬をはじめとする動物を虐待したり、殺生したりすることを禁止するお触れ書きのことです。この本は、生類憐みの令について小学校や中学校の先生が授業をするときのネタ本、「授業書」として構成されています。

私がこの本を読んで面白かったのは、生類憐みの令そのものではありません（私はそれほど歴史ファンではないので…）。私が注目したのは、聞き手が初めはあまり興味をもっていない中で、いかに食いつかせるか、という工夫の部分でした。この本では、生類憐みの令が「クイズ仕立て」で紹介されていきます。犬の他にどのような動物が保護されたと思いますか、虫は保護されたと思いますか、人は保護されたと思いますか、生類憐みの令は何年間続いたと思いますか…。

こうしたクイズを出して、どの選択肢が正解かを子どもたちに考えさせる。あるいは、グループで話し合いをして決めさせる。ひとりおとり答えが出そろったところで正解と根拠になる資料を提示する。そして、なぜそれが正解なのか、間違えた人はどこでつまずいたのか、を考えさせる…。このような授業のやり方は「仮説実験授業」と呼ばれ、著者である板倉さんが長年提唱してきました。

板倉さんはもともと理科教育の専門家です。教科書に沿って公式（真理、と言ってもよいかもしれませんが）を覚えさせる、詰め込み型の教育を批判してきました。たとえば物理の法則を教える場合も、はじめから正解を教えるのではなく、「重いものと軽いもの、どちらが速く落下する？」といったクイズ仕立てにして、子供たちに予想させる。その後実験して、答え合わせをする。その上で、なぜそれが答えだったのか、自分はなぜ間違えたのかを考えさせる。こういう授業にしたほうが、子供たちは興味を持つし、本当の意味で理解し、頭に定着するのではないか。板倉さんたちは50年くらい前からこうした授業を提唱してきました。その影響を直接・間接に受けた学校の先生は大勢いるので、みな

さんも、このような授業を受けたことが一度や二度はあるのではないかと思います。

仮説と実験を柱とした授業は、実験ができない、いわゆる「文系」科目にそのまま持ち込むわけにはいきません。しかし、歴史や社会についても、同じように仮説を立てさせた上で、実験の代わりに、さまざまな資料を答えとして提示する。なぜそれが答えだったのかを話し合わせる、といった形で授業を展開できるということで、その見本例として書かれたのが『生類憐みの令』の本なのです。

考えさせるクイズ

クイズ仕立てという手法は、今の社会ではすごく裾野が広がっています。テレビでもクイズ番組はたくさんありますよね。とくに民放が少しでも「お勉強」がらみの話題を取り上げるときは、視聴者が拒絶反応を示さないよう、クイズ形式を取り入れるのが一般的です。

クイズ形式の良いところは、問題と選択肢を示されると、つい答えを選びたくなってしまふところ（社会学的にみると、この反応自体が学校教育で植え付けられた性向のようにも思えますが、それはともかく…）たとえば、生類憐みの令は何年ぐらい続いたと思いますか、という問題。A:2年、B:5年、C:10年、D:20年といった選択肢を与えられると、皆さんはいろいろ想像しはじめます。このようにむちゃくちゃな法律だから、長くは続いていないだろうとか、あるいは、江戸時代は將軍の権威が強いから生きていた間はずっと続いたのではないかと、など…（みなさんも少し考えてみてください）。

どれが正解かはわからない。ただ、自分の

持っている知識や日常経験を総動員すれば、何とか正解にたどり着けそうな気がする。それで、ふたを開けてみると、惜しいところで間違っている、というのが一番いいクイズだと思います。ちなみに、生類憐みの令は、実際は約20年続いています。正解できましたか？ 付け加えると、綱吉が亡くなった後、すぐに廃止されています。そこから、江戸時代は將軍の力が強かったこと、生類憐みの令が非常に嫌がられていたことなどが読みとれるわけです。

もちろん、クイズであれば何でも良いわけではありません。クイズという形式は何にでも使えるところがあって、知らなければどうしようもない、細かい暗記ものもクイズにできます（たとえば大学入試のように…）。そうではなくて、常識的に考えると〇〇に思えるけれども、じつはその逆だったというように、驚きをもった「考えさせるクイズ」が理想的です。板倉さんの本の一番すごいところは、歴史という暗記ものになりがちなのを、現代に生きる私たちの感覚に引きつけて考えられるクイズに仕立て上げている点だと思います。

社会学が「自分の興味関心」を大事にするわけ

このように、何が面白くて、何が面白くないのかというのは、もともと興味関心があるかどうかだけで決まるのではなく、それをいかに伝えるか、クイズのような工夫がされているかどうかでも大事になります。だから教員はきちんと工夫して授業をしないと、いつも肝に銘じていますが（実践できているかは微妙ですが…）、それと同時に、これは実は

社会学部で学ぶ皆さんにとっても大事なことだと思っています。

大学での学びは、自分で「問い」をたてることが大事だ、という話は聞いたことがあるでしょう。「問い」といわれると、非常に難しいことのようにも思えますが、「クイズ」と言い換えれば、だいぶ身近に感じるのではないのでしょうか。ただし、クイズ番組を見るときとの大きな違いは、クイズを解く側ではなく、作る側に回るということです。教員から教えられておしまいではなく、多少不器用であってもかまわないから、自分自身の興味関心から出発して、それを深めていき、最終的には何か新しい知識を自分なりに生産・発信できるようになろう、ということです。

こうした「学生主体」ともいえるスタンスは、社会学が学問として持っている性格とも深く関わっています。社会学というのは、いま生きている社会を対象とする学問です。社会のあり方というのは、10年、20年たてばガラッと変わります。だから、いま皆さんが関心をもつことに対して、皆さんの子どもの世代が関心をもつかといえば、そうとは限りません。それに対応して、同じ社会学という学問であっても、皆さんが学んでいる社会学と、一つ後の世代の子どもたちが学ぶ社会学は、相当違っているはずで、こうした時代の変化を踏まえたとき、一昔前の学生たち、それがいま教員になっているわけですが、その人たちが大事だと思うテーマを押しつけても、時代遅れ、ピント外れになっているかもしれません。皆さんの世代が社会の主役になったとき、何が切実な問題なのかは究極的には皆さん自身が決めることです。極端な言い方をすれば、真理は教員の側にはなく、皆さん一人一人の中にあるともいえる。

こういう発想が社会学のベースにあって、だからこそ卒論のテーマはできるだけ本人の興味関心に沿って決めた方がよいという方針が出てくるのです。そして、皆さんがどういったテーマを選ぶのか、それをどうやって論文へと仕上げていくのかを観察しながら、今度は教員の側が今の社会のあり方を学ばせてもらう、というのが社会学部のゼミのあり方だと思っています。

興味関心を広げていくには

「自分の興味関心に沿って」といっても、適当に好きなことをやっていれば良いということではありません。ひとつのテーマに一年近くも打ち込み続けるというのは、たとえそれが自分の好きなことでも結構大変です。しかも、「興味関心」に力点をあげばおくほど、同じゼミの中でもテーマの幅は広がり、「一人旅」感が強くなります。それで、テーマを変更したくなったりもします。しかし、テーマを変えてうまく行くと限りません。変更後のテーマでも、やはり息切れしてしまうかもしれない。大事なのは、自分の心の中にある興味関心の炎が燃え尽きそうになったとき、いかに自分なりに燃料を供給しつづけるか、ということです。

こうした局面で役に立つのが、先ほど紹介した「考えさせるクイズ」の発想です。面白いことというのは、そこらに転がっているのではなくて、クイズ仕立てにするとか、それを取り上げる人間の工夫で、面白くなる場合が少なくありません。自分があまり関心を持ってそうにない話題であっても、あるいは逆に、自分にとっては面白いが、自分以外は誰も関心を持ってくれないような話題であって

も、なんとか興味関心を引くような工夫ができませんだろうか？ その話題を使って、驚きを含んだ、「考えさせるクイズ」を作れないだろうか？ こういう点を意識することで、初めはあまり関心を持てなかった話題に対しても、積極的に取り組めるようになるのではないかと思います。

仕事でも家事でも趣味でも何でもそうですが、「おお、面白い」という好奇心がないと、

なかなか上達しません。せっかく「面白がる」ことを求める社会学という学問に取り組んでいるわけですから、自分なりの面白がり方、興味関心の広げ方というのを意識して、日々の授業を受けてほしいと思いますし、それが卒論の執筆や、その先の人生を豊かにすることにもつながっていくと思います。

(社会学部准教授)